

遠い記憶を新たに

戦後75年、募る平和への思い

◎問い合わせ 秘書広報課 ☎23-3174



① 都城西飛行場跡祈念碑
「凱旋記念 都城飛行場」

都原町 昭和9年完成
都城西高校正門前に所在・同20年5月に空爆を受け閉鎖



② 都城西飛行場跡祈念碑
「特別攻撃隊出撃の地」

都原町
市営都原団地敷地南東の角に所在・同19年以降、「都城西飛行場」と呼ばれる



③ 都城東飛行場跡祈念碑
「特別攻撃隊出撃の地」

都北町 昭和19年完成
住友ゴム工業(株)宮崎工場東側の緑地公園に所在



④ 都城北飛行場跡

野々美谷町 昭和20年完成
丸野小学校北側に所在



太平洋戦争が終わり、75回目の8月15日を迎える今夏。年月は経過し、戦後に生まれた世代が約85割（2019総務省「人口推計」）を超え、その記憶は、遠い過去のものになろうとしています。一方で、世界に目を向けると、戦争の火種は至る所でくすぶり、紛争や内戦が続く地域も多く、いまだに悲劇が繰り返されています。

かつて世界に目を向け、東アジア地域を中心に進出を試みた日本。太平洋戦争だけでも※310万人もの死者（軍人・軍属230万人、民間人80万人）を数え、昭和20年（1945）8月6日の広島市、同9日の長崎市への2発の原子爆弾の投下という、決して癒えることのない大きな傷跡を残しました。

今回は、戦争体験者や遺族など、多くの人がさまざまな思いで迎える終戦の日を前に、戦争体験者の声を交え市内に残る戦争の記憶や傷跡を紹介しながら、「遠い記憶を新たに 戦後75年、募る平和への思い」を特集します。また、「人の風景」は、特別攻撃隊（特攻隊）として訓練を受け、生と死の狭間を生き抜いた東郷勝次さん（鷹尾三丁目）の戦争体験とその後の活躍を紹介します。

※太平洋戦争を含む第2次世界大戦中の世界全体の戦争死者は、5千万、8千万人と言われています

遠い記憶を新たに 戦後75年、募る平和への思い

市内に残る戦争の記憶

：市内にあった3飛行場のおおよその位置



⑥ 陸軍墓地記念碑
「戦傷病者之碑」

都島町
都島公園内に所在



⑤ 陸軍墓地慰霊碑

「都城特攻振武隊 はやて」

都島町
都島公園内に所在



⑩ 都城駐屯地郷土館

「旧陸軍連隊本部跡」

久保原町 明治41年竣工
陸上自衛隊都城駐屯地内に所在
見学は随時受け付け要予約
(☎ 23-3944)



⑨ トーチカ

小窓から機関銃などを構えた鉄筋コンクリート製の防御陣地
横市町 昭和18年完成
都城横市郵便局西側サクラ並木沿線に所在



⑧ 動員生徒被爆殉没碑

祝吉一丁目
都城農業高校グラウンド北西の角に所在



⑦ 海軍戦没者慰霊碑

都島町
城山公園内に所在

特攻隊が飛び立った地

太平洋戦争中、市内には3つの飛行場がありました。そのうちの1つ都城西飛行場は、昭和9年に都城市飛行場として市が都原町に建設しましたが、昭和19年に陸軍が接収。昭和20年には大規模な空爆を受け閉鎖となりました。この間、川崎航空(株)の飛行機工場の建設に合わせ、現在の都城家畜市場一帯に昭和18年、都城東飛行場が建設。これら2つの飛行場から、79人(西飛行場10人、東飛行場69人)の若者が、生きて帰ることなく、沖縄など南の空に飛び立っていました。

戦火に包まれた都城

空襲に関係する資料は、昭和23年の市役所の火災で消失しましたが、平成9年に市などが行った調査によると、終戦間近の昭和20年、都城も度重なる空襲を受け、市民など88人が犠牲となっています。

中でも、昭和20年5月8日、郡元町にあった川崎航空の飛行機工場が大型戦略爆撃機B29の爆撃を受け、戦闘機製造などに従事していた学徒動員の小林中学校生徒11人が死亡。また、広島市に原爆が投下された8月6日には、戦闘爆撃機による焼夷弾投下と機銃掃射により、市内広範囲で52人が犠牲となりました。



昭和7年生まれ
都城空襲と戦争を語り継ぐ会 会長
坂口 フミ子さん (88歳)

広島に原爆が投下された昭和20年8月6日、当時13歳だった私は、5歳の弟と2人で留守番をしていました。ちょうど昼に差し掛かるころ、空襲警報が鳴り響き、米軍機による空爆が始まりました。慌てて防空壕に避難しましたが、不安と恐怖で体はガタガタと震えていました。やがて空襲は止み、早鈴町の親戚を頼ろうと、歩いて親戚の家に向かいました。途中、あちこちで火の手が上がり、明道小学校や都城市役所が激しく燃えていたのを覚えています。早鈴町に差し掛かった辺りで、金御岳の方から米軍機が再び飛来。爆撃により市内は真っ赤に燃え上がりました。その異様な光景に目を止めた瞬間、低空飛行で飛んできた米軍機が私と弟に向かって銃撃。一瞬の出来事で、経験したことのない激痛

から自分の右手を見る
と、親指と4本の指先が
吹き飛び、骨が見えています

た。混乱しながらも弟に目を向けると、右の腹部から左のお尻に弾が貫通し、お尻の肉が花開いたようになり、弟はすでに息絶えていました。私は、突然の惨劇に心臓が破裂しうになりながら助けを求めようとしたが、力尽きその場で倒れ込みました。

それから病院に運ばれ「切断しないと命が危ない」との医師の判断で右手首から先を切断。火の着いた炭をつかんでいるような強烈な痛みに、一カ月以上もだえ苦しみました。

戦後75年。一瞬にして弟を失い、右手を失った私は、悲しみや苦しみに不自由さに耐えながら今まで生きてきました。戦争ほど憎く、残酷なものはありません。世界中が、戦争のない世の中になることを切に願います。



一生忘れること のできない 恐怖

当時、日本の統治下にあった朝鮮の京城府

(現…大韓民国ソウル特別市)

で小学1年生のときに終戦を迎え、母と弟の3人で日本へ引き揚げました。途中、家族と生き別れて泣き叫ぶ子の姿や、日本人が虐げられる場面を目の当たりにし、恐怖に襲われたことを覚えています。

貨物列車に身を潜めながら釜山港にたどり着き、半月近くかけて門司港に到着。安堵したのも束の間、列車内は帰還する人々であふれ返り、私たちは座することもできず、洗面台の上に三日三晩立ち続けました。空腹で意識がもうろうとしていた時、私と2歳年下の弟に、一人の帰還兵

がなけなしのおにぎりを差し出してくれました。「死ぬか、生きるか」

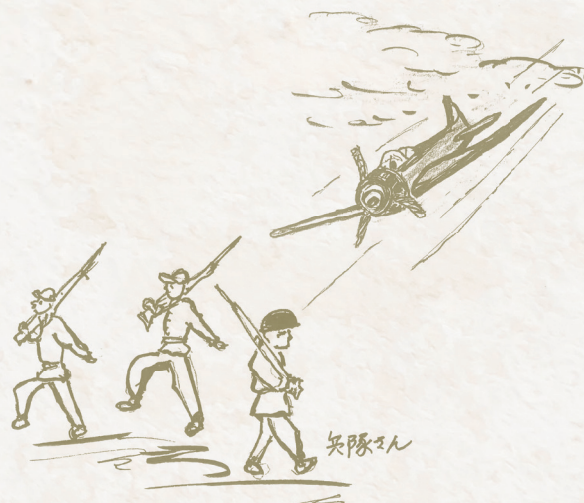
昭和13年生まれ
宮崎県遺族連合会

藤田 悦子さん (82歳)



の状況下、慈悲の心に触れ、子どもながらに心が救われた瞬間でした。ようやくたどり着いた故郷の都城は、一面が焼け野原。軍人だった父の戦死を知らされ、絶望を感じた時でもありました。その後、食料や物資などの不足で戦後の混乱期は数年間続きましたが、苦難を乗り越え、教師として退職まで教壇に立ちました。

現在は遺族会の語り部として、毎年県内の小中学校を訪問。大切に保管してきた「戦地からの父の手紙」などの資料と共に戦争体験を伝えることで、子ども達が戦争を実際に起きた出来事として捉え、平和の尊さについて深く考えるきっかけにしてほしいと願っています。



昭和2年生まれ
有馬 妙子さん (92歳)



昭和20年5月11日、宮崎師範学校女子部（現・宮崎公立大学に位置）の生徒として、同附属国民学校で教育実習を終え、寄宿舎に帰ろうとし

不戦の誓い、後世につないでいく

ていた夕方、空襲警報と同時に空爆が始まりました。みんなで校庭内の防空壕に急いで避難しましたが、避難が遅れた同級生らは爆風で崩れた土砂に飲み込まれました。驚いた私と友人は、素手で土砂を必死にかき分け、同級生らをなんとか救出。その後、裏にあったとうもろこし畑に逃げ込みました。辺りでは「ボスツ、ボスツ、ボスツ、ボスツ」と、上空から放たれた機銃弾が乾いた音とともに地面に突き刺さり、恐怖に震え、生きた心地がしなかったことを覚えています。空襲が止み、爆撃を逃れ

た体育館に戻ると、下校中だった女子児童らが亡くなったことを知りました。変わり果てた我が子に、泣き崩れる母親らの姿は、今思いうちしても、辛く胸が張り裂けそうになります。悲惨な戦争を生き抜き、穏やかな日々を過ごす今、一番案じているのは、「未来に続く平和」です。子どもたちに二度とこのような経験をさせないよう、この先の未来が戦争のない国であることを強く願っています。



で語り部活動をしています。

「教科書の中の戦争」ではなく、「日常にあった戦争」を伝えることで、不戦の誓いを次世代につないでいきたいです。

昭和10年生まれ
安藤 高幸さん (84歳)



築士として地区の忠霊塔の設計に携わった当時のことなども写真に記録。記憶をたどる中で、父や兄、担任の先生が戦争に召集され、無事に戻るか心配したことや、戦後の食糧難や住宅不足で復興まで大変だった道のりをはつきりと覚えています。近年は、地区の高齢者らが残っていた戦争体験メモの存在を知り、それぞれの体験を代弁していかねければと、平成28年に戦争体験記「私の戦争体験談 平和」を作成しました。現在は、模造紙や体験記を使い、主に中郷地区とその周辺の小中学校

※ P8 - P11に使用している戦争中の絵は安藤さんの作画を使用しています

まとめ
「不戦の誓い」と
「平和の大切さ」を
心に刻む

戦後75年の節目に、改めて「戦争の悲惨さ」と「平和の大切さ」を集めました。戦禍の中、極限状態での戦いや家族を失う悲しさ、空襲におびえる日々など、常に死と向き合っていた生きなければならなかった戦争体験者の話は、想像を絶するものでした。終戦を迎えても、食糧難や不景気から、人々の苦しみが続いていたことを知り胸が詰まる思いでした。今、私たちが当たり前前に過ごしている平和な日常は、決して当たり前なことではなく、戦争の悲劇を経験した先人らが、辛い記憶を呼び起こしながらも私たちに戦争体験を伝えることで、「不戦の誓い」と「平和の大切さ」を訴え続けてきたからこそ、ではないでしょうか。戦後75年を迎え、戦争を知らない人が8割以上を占めるようになった今、戦争の苦しみや悲しみを風化させることなく、「戦争の悲惨さ」と何ものにも代え難い「平和」の大切さを、これから先の未来につないでいくことが、今を生きる私たちの責務です。

生と死の狭間^{はざま}を生き抜いた
証言者が語る、
命の重さと平和の大切さ

大正15年生まれ
かつじ
東郷 勝次さん
(鷹尾三丁目・94歳)

東郷さんがまとめた戦争体験の手記の一部を
都城歴史資料館にて10月11日(日)まで展示中。

人の風景

—特別編—

太平洋戦争の末期、特攻要員として幾度も待機しながらも出撃を免れ、生き延びた東郷勝次さんが、鷹尾三丁目で穏やかに暮らしています。

東郷さんは、残された時間の中で、「戦争の真実」を後世に伝えなければならぬと、戦争体験を手記にまとめています。

大空に飛び立つ夢を抱いた少年時代

自宅周辺にあった都城西飛行場（都原町）で飛来する飛行機を見て育った東郷さんは、戦闘機のパイロットを目指し、昭和17年10月、16歳のとき、少年飛行兵として東京陸軍航空学校に入校しました。上級校の熊谷陸軍飛行学校（現・埼玉県熊谷市）で操縦基本技術を習得。当時日本の占領下であった中国の飛行隊に配属され、三式戦闘機（飛燕）の



昭和20年3月、飛燕と共に撮影

戦技訓練中だった昭和20年2月、突然上官から、特別攻撃隊（特攻隊）への参加を「熱望する・希望する・希望しない」と書かれた志願書を、手渡されました。東郷さんは、死の恐怖を感じながらも「熱望」を選択しましたが、指名されませんでした。

特攻を真近に控えた中での「苦悩と葛藤」

戦局が悪化する中、三重県伊勢市近郊の飛行師団に赴任した東郷さんはその直後、上官から「諸君は特攻要員だから指示するまで待機せよ」と告げられました。生きながらの死の宣告に東郷さんは「全身に電流が走り、体全体が硬直したのを、今でも忘れることができない」と顔をこわばらせます。

数日待機した後、戦隊への配置替えとなり、その時点で特攻は白紙となりました。

大空に散っていった仲間たち

一緒に戦技訓練を受けた同期らが、特攻隊員として出撃決定。出撃基地の知覧に向かう中継で芦屋飛行場（現・福岡県）に立ち寄っていた同期と再会した東郷さんは、あまりにも重苦しい雰囲気の中、交わす言葉も見つからず「俺たちも必ず後に続くからな」と繰り返しながら決別しました。同期らは、「血風隊」として昭和20年5月、知覧飛行場（現・鹿児島県南九州市）から飛び立ち、散華しました。

2度目の「熱望」

昭和20年6月下旬、万世^{ばんせい}飛行場（現・鹿児島県南さつま市）で特攻隊の援護に当たっていた東郷さんに、再び志願書が届きました。死を覚悟し、2度目の「熱望」を選択しましたが、直後に多くの人が犠牲になった沖縄戦が終結。その後、東郷さんは特攻隊員として出撃しないまま、佐野飛行場（現・大阪府泉佐野市）で終戦を迎えました。

その後の活躍

日本の「管制」の礎を築く

死を免れた東郷さんは戦後、航空自衛隊に入隊し、航空管制業務の基幹要員第1号としてアメリカへ留学。

語学に苦勞しながらも、知識と経験を蓄え帰国しました。その後、長きにわたって航空管制業務に携わり、人材育成にも尽力。日本の航空管制の礎を築く功績を残しました。



管制官時代、留学先で。左から2番目が東郷さん

生き残った者の責務

戦後75年を迎える今夏、遠く離れた青春時代を振り返り、「共に青春を過ごし、大空に散っていった仲間の思いを伝えることが、生き残った者の責務」と語気を強める東郷さん。「夢を抱く若者の犠牲の上に、平和は成り立たない。絶望しか生まない無謀な戦争は、二度と繰り返してはならない」と日本の未来を案じながら、命の重さと平和の大切さを強く訴えていました。